

春は何だったのだ。今、じーっと振り返り見る時、戦争ほど馬鹿なことはない。最高に尊い人命を殺戮ころりし大自然を破壊する。八十五歳の老兵は声を大にして叫びたい。「二度と戦争を行うな」と。合掌。

## 私の従軍記

岐阜県 森 金次郎

私は、大正十一（一九二二）年十二月十四日、岐阜県武儀郡武儀町で生まれました。昭和十七年徴兵検査を受け、見事甲種合格。歩兵で中部第四部隊へ現役兵として入営しました（第四部隊は岐阜の元の第六十八連隊）。入営は昭和十八（一九四三）年三月十日の陸軍記念日でした。

その当時の我が家族構成は

父母共に健在 農業及び林業

農地約一町歩、山林約四十七町歩

兄 戦死 昭和十八年一月 ニューギニヤ

本人 健在 蚕業技手（岐阜県）

妹四人弟一人 健在 皆若く幼い

という状態で、私が兵役に就くことは家庭にとって打撃となりませんが、当時の国情からすべてをなげうって勇躍入営しました。

入営して約一カ月後、満州第六三四部隊（第二十五師団の歩兵第七十連隊（第四九〇五部隊））へ転属となり、満州国東安省密山県へ出征でした。この土地は、ソ連領の沿海州に近い酷寒の地で冬季はマイナス三〇度でした。この寒さに慣れない初年兵は大変困りました。特に皮膚の弱い者は耳たぶがふくれてきたり、皮膚が荒れて炎症を起こしたりで大変でした。日本内地の寒さとは大違いでした。

東方に興凱湖という広大な湖があり、その近くの花山という地点に駐留し、陣地構築や敵情監視を兼ねて警備をしました。入浴設備がないため、虱がわいて虱退治に苦労した思いもあります。私共の駐屯していた時期、地域では戦闘、作戦、討伐等はありませんでしたが、気候、風土、疫病には苦しみました。寒さ防

ぎにベーチカを焚くのですが、その石炭を運ぶのは満人でした。

そのうちに一期の検閲があり、皆二つ星の一等兵になりました。成績順に一選抜、二選抜となるのです。

私は幸いにも一選抜でした。軍隊では元気で活発に動き、上の者のウケがよいのが得をする。陰のたとえて曰く「軍人は要領を尽くすを本分とすべし」と、私は被服係の要員にされて楽をしました。

私の中隊は機関銃中隊で馬がいました。馬には噛む、蹴る、抱き付く等の悪いくせをもつ馬がいて兵を困らせました。岐阜の同年兵の青木君もズボンを噛み破られたとか。毎日の馬運動、蹄の手入れ、厩の掃除、その他と息つく間もなく忙しい。兵は食事の時間がとれなくても、馬には水や餌をきちんとやらなければいけない。怠るとひどいお叱りと制裁があります。人間やめて馬になりたいと言う戦友もあるほどで、一笑に付されぬ心境ではないだろうか。

約二年目の昭和二十年四月、本土決戦防衛準備のた

め第十六方面軍第五十七軍隷下となり南九州に転用され、機動打撃部隊訓練に励みました。満州から釜山を経て博多へ。鹿児島県の鹿屋基地を警備する。敵の艦戦機の絶え間ない執拗な連日の攻撃には大変悩まされました。しばらくして宮崎県都城北方へ移動し、山間の点在する民家へ一個分隊位の小さい単位で分宿をしました。ここでも敵機の絶え間ない攻撃が続く。山の高い所で応戦するが敵機は落ちない。夜でも曳光弾で撃ってくる。彼我の戦力の大きな違いを深刻に味わわれて、暗い気持ちに落ち込む日が続きました。

松浦という部落でテント生活した日も続く。一個連隊が一個所に集結することなく、小隊、分隊ごとに分かれてそれぞれに独立しているのです。全体の状況とか、意図なんか一切不明で、孤立無援に近い状態でした。

宮崎県での私共の仕事は穴掘りをして、避難する住民の隠れ場所を作ること、夜は灯火管制を厳しくして小さな光も洩れ出ないことを徹底すること等の住民保護が主なもので、上陸してくる米軍の迎撃訓練

などはやりませんでした。理由は、昼間は絶え間ない執拗な米軍艦載機の群の攻撃から逃れるため、森や林の中へ潜み避難していたからでした。

そのうちに終戦になり気楽になりました。やがて米軍が上陸して来ました。MPの腕章を巻き、ジープに乗り、あちこちと丁寧に調べていました。日本軍の復員が始まり、大部分の者は帰って行きましたが、二十八人の者は残留させられて、使役要員となりました。

全員米軍と同じくMPの腕章を腕に巻かされて抑留同様です。

武装解除の兵器を一カ所へ集めトラックに載せません。どこへ運び、どのように処分したのか日本人には不明です。

その他いろいろの残務整理をやり、昭和二十年の年末にやっと復員となりました。国鉄の客車に無理に割り込んで乗ると窓ガラスは割れているし、車内は汚れ、悪臭もあり、全然日本内地とは思えぬほどの荒廃ぶりでした。

沿線の市街はすべてB29の焼夷弾攻撃や、その他の艦載機などからの攻撃で焦土と化し、一面の焼野原である。田舎の方はどんな有様であろうかと心配になってきました。

岐阜市まで帰り着くとマルブツデパートのみが一軒、建ち残っていて、あたり一帯がれきの山である。宮崎県はこんなに酷くはやられていなかったのですが、やはり日本有数の巨大基地である各務ヶ原を抱えていた関係か。とにかくもう慄然、啞然、暗然のミックスの暗澹たる気持ちでした。部隊長が復員解散式に訓示された「焦土と化した故郷の、祖国日本の復興に努力せよ」との教えが目の前に現実の問題として頭を叩いていました。

顧みれば満州では訓練と警備で実戦はなく楽土でした。同年兵一人病気で死亡しました。

内地九州の宮崎県では敵空軍に徹底的に制圧されて、自主的な行動や生活が一つも叶わず、勝敗の帰趨など超越した無抵抗一筋の無残な敗戦の毎日でした。外道な戦術である特攻にたよるしかない苛烈な戦況に

背を向けての私共の内地南九州勤務は、靖国神社に神鎮ります幾多の英霊に対し慙愧に耐えない次第でした。

さて、昭和二十年十二月末、復員帰宅しました。青年団、消防団に入り地域の復興に従い、二十八歳で結婚、子は女ばかり四人、孫は七人、妻は平成八年十一月死去しました。私は目下独居老人です。

結婚後の経歴は町議会議員、農地委員、老人会会長、軽スポーツ会会長を経て、ただ今は恩欠連岐阜県連会会長を拝命中である。申しおくれましたが、復員後は県の林務課に入り定年まで勤務しました。

最後に、戦死も戦傷病も関係なく五体無事で復員し、祖国の再建復興にも、我ながら応分の寄与と貢献ができました。人並みに家庭も持って、平凡ながら夫から父、祖父と脱皮し成長して、現在七十八歳の老境に身を置き、先輩、同僚、後輩と共に、手をたずさえて日本の弥栄を祈念すること切なるものがあります。

恩欠者救済の画龍点睛を望むことに、老躯を捧げて

悔いなしです。

## 我が青春の空白

岐阜県 清水 秀蔵

六十年も昔のことで、忘れたことが大部分です。一生懸命に思い出してお話します。

まず家族は、両親のもとに姉と弟の三人兄弟の五人家族でした。子供心の記憶では、世間並の生活状態でした。自分が六歳か七歳の時に両親が離婚しました。それから父親は三年程した頃に死亡しました。自分は母方の祖父母に引き取られて成長しました。実家の祖父母が死亡して家が無住人になりますから、母方の祖父母と一緒に実家で生活しました。少々複雑な状況でしたが、無事に学業も修めて高等科二年を卒業しました。

近隣にかわらの窯元があり、住み込みで奉公に行きました。屋根がわらが主力産業でした。当地方は冬季